

HTLV-1母子感染を防ぐために

平成28年度版



平成28年度厚生労働省科学研究費補助金成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業
【HTLV-1母子感染予防に関する研究】

HTLV-1ウイルスについて

HTLV-1ウイルスはヒトT細胞白血病ウイルス-1型と呼ばれ、成人T細胞白血病などを発症する可能性があることがわかっています。日本は先進国の中でHTLV-1抗体陽性者が最も多く100万人を越えています。西日本に多くみられましたが、人口の移動とともに拡散する傾向にあります。

HTLV-1ウイルスによっておこる病気

成人T細胞白血病・リンパ腫 (ATL)

ATLのほとんどが母子感染に由来します。40歳以前の発症はまれで、60歳代後半を中心として発症しています。抗体陽性者の発症率は約5%と考えられています。リンパ節腫脹、皮疹などを認めます。



HTLV-1関連脊髄症 (HAM)

30~50歳代の発症 (平均40歳) が多く1年間でキャリア約3万人に1人の割合で発症すると考えられます。抗体陽性者の発症率は0.3%と考えられています。下肢のつっぱり感や歩行時の足のもつれなどが進行性に起こります。

赤ちゃんへの感染経路

主な感染経路は母乳による母子感染です。母乳中のHTLV-1ウイルスに感染したリンパ球が体内に入ることにより感染します。母乳栄養の場合、感染率は17.7%と報告されていますので、母乳をやめて人工栄養にするなどの方法をとることで母乳による母子感染を防ぐことが重要です。ただし、完全に人工栄養にした場合でも約3%の児では感染が見られるため、母乳以外の感染経路 (産道感染、経胎盤感染など) も考えられています。

出生した赤ちゃんについて

乳幼児期に特別な健康上の問題を生じることはありません。日常生活の中では特別な配慮は必要ないとされています。

母子感染予防

現時点では母乳をやめて完全人工乳にすることが最も信頼できる予防手段とされています。近年、母乳の利点をできるだけ活かす方法として、短期母乳、凍結母乳が考えられていますが、まだ確立された方法ではなく、現在厚生労働省研究班により研究が行われています。

【完全人工乳栄養】

初乳も含め母乳を全くあげないことで赤ちゃんへの感染を予防する方法です。

【短期母乳栄養】

授乳期間を生後90日までに制限する方法です。子宮内でおかあさんから赤ちゃんに移行した抗体 (免疫力) が残存すると考えられる短期間 (生後90日間) だけ母乳栄養を行い、その後、人工乳にする方法です。

【凍結母乳栄養】

搾乳して24時間以上凍結することで、感染リンパ球を破壊してから授乳する方法です。



栄養方法による母子感染率

平成21年度厚生労働科学研究では下記の報告がなされています。短期母乳と凍結母乳についてはデータが少なく、効果が期待されていますが、まだ確証は得られていません。

栄養方法	人数	赤ちゃんへの感染率
母乳栄養 (90日以上)	525人	17.7%
完全人工栄養	1,533人	3.3%
短期母乳 (90日未満)	162人	1.9%
凍結母乳	64人	3.1%

(平成21年度厚生労働科学研究より)

・母乳を完全に遮断しても約3%の赤ちゃんに感染が起こる可能性があります。

栄養方法別の長所と短所

栄養方法	完全人工栄養	短期母乳栄養	凍結母乳栄養
考え方	* 母乳中のウイルス感染細胞を子どもに一切与えない	* 母乳中のウイルス感染細胞を子どもに与える期間を制限する	* 母乳中のウイルス感染細胞を破壊してから子どもに与える
長所	* 母乳を介した感染の予防法として最も確実	* 短期間であるが、母乳栄養の利点を活かすことができる * 直接授乳することができる	* ある程度母乳栄養の利点を活かすことができる
短所	* 初乳も含め、母乳を全く飲ませることができない * 母乳分泌抑制のための治療が必要になることがある	* 赤ちゃんが嫌がったり、周囲の理解が得られなくて短期 (90日) で断乳することが困難になることがある (母乳の期間が長くなるほど感染の危険は高くなる) * 断乳時に母乳分泌抑制のための治療が必要になることがある * まだ確証がない	* 搾乳、凍結、解凍などに手間がかかる * 24時間以上の凍結が必要なので、出生後24時間は人工乳が糖水を与える。 * 近年のcell alive system (CAS) の冷凍庫は予防効果が期待できない可能性がある * まだ確証がない

赤ちゃんの抗体検査

確実に判定ができるのは3歳以降とされています。抗体検査については、3歳になった頃に医療機関に相談し、説明を聞いて決めるのが良いと考えられます。



短期母乳の方法と注意点

- 60日まで：母乳（母乳が十分でないときは人工乳との混合でもよい）
- 60-90日：搾乳した母乳を哺乳瓶で与える、人工乳を導入するなど母乳中止への準備
- 90日以降：人工乳



短期母乳の場合には、赤ちゃんが哺乳瓶での授乳を嫌がるなどにより母乳をやめられなくなることがあります。そのため、母乳中止に向けて計画的に取り組んでいく必要があります。また周囲の理解と協力も必要です。母乳期間が90日を超えて長くなればなるほど赤ちゃんへの感染の危険性が高くなります。

凍結母乳の方法と注意点

- 1回の搾乳で1パックの母乳パックをつくります。
- 20℃以下で24時間以上凍結してからお使いください。冷凍庫での母乳の保存期間は3ヵ月です。
- 凍結した母乳の解凍は、室温で放置し自然解凍させるか、流水で解凍してください。微温湯（30～40℃）での解凍は20分以内で終わるようにします（微温湯につけておくのは20分以内）。授乳前に室温（27℃くらい）まで母乳を温めます。電子レンジで加熱することは避け てください。一度暖めたら4時間以内に使い切ってください。また、解凍した母乳は冷蔵庫で保存し24時間以内に使用しましょう。

セルアライブシステム：cell alive system（CAS）の冷凍庫は鮮度を保って凍結保存するため、細胞が破壊されにくい可能性が考えられます。

受診スケジュール

- *出生までに：栄養方法を確認しておきましょう
- *生後1ヶ月：栄養方法が実施できていることの確認
- *生後2ヶ月：栄養方法が実施できていることの確認（短期母乳を希望される場合、母乳中断準備の確認・相談）
- *生後3ヶ月：栄養方法が実施できていることの確認（短期母乳を希望される場合、断乳の確認・相談）
- *生後4ヶ月以降：通常の健診スケジュールで受診しましょう
- *3歳以降：抗体検査
抗体検査についての説明を聞いて検査を受けるかどうかを相談しましょう

（不安や心配なことがあれば受診時に相談しましょう）



受診記録

	年月日	栄養方法	医療機関
出生時			
生後1ヶ月			
生後2ヶ月			
生後3ヶ月			
生後4ヶ月			
生後6-7ヶ月			
生後9-10ヶ月			
生後1歳			
	年月日	医療機関	
1歳6ヶ月			
2歳			
	年月日	抗体検査	医療機関
3歳		済・未	

